

## 岸田劉生の図案画

### —— その創作活動への影響と意義

鈴木 明德 (フリーランス)

麗子像で有名な画家である岸田劉生(1891-1929)は、油彩画を中心とする画業とは別に、雑誌や単行本などの装幀や挿絵といった様々な図案画の仕事に取り組んできたことでも知られる。今回の研究の目的は、作品の造形分析を通して挿絵を含む図案画の取り組みが劉生の本画(油彩画)をはじめとした創作活動全般に与えた影響を可視化すること、そして劉生の創作活動における図案画の取り組みの意義を考察していくことにある。造形分析の対象は、劉生の画家遍歴で最もダイナミックで前衛的な創作活動期間である北方ルネサンス作風期の油彩画を中心に、図案画、水彩画、素描など画業とは異なる分野の作品も対象に入れて、劉生の独創性と着想の源泉をたどっていく。

先行研究の多くが日記や、新聞・雑誌の記事といった、劉生が残した言説を起点に創作態度や背景の考察に取り組んでいたのに対し、今回の研究は劉生が受容した様々な海外からの古典作品、版画、挿絵などから影響を受けたと思われる劉生作品の造形に表れている痕跡をジャンル問わずたどることで、劉生自身でさえ自覚していなかった、新たな劉生の創作態度の一面をつまびらかにできると考えた。

なお造形分析は、ヒューリスティック評価と呼ばれるWEBサイトやアプリのユーザビリティを調査する際に用いられる手法を応用して実施した。具体的には1913年から1918年の《麗子五歳之像》に至るまでの北方ルネサンス作風期を対象に、本画(油彩画)、水彩画、図案画、挿絵、素描などで共通して使われた①アーチ状の装飾モチーフ、②劉生のサイン(署名・作品完成の年月日)、③植物・大地のモチーフ、④幾何学モチーフの4つのモチーフの画中への使われ方とその目的、造形面での違いを時系列で比較していくことで、同じモチーフでも時期によって有意差が見られるかを検証した。そして、最終的に本画(油彩画)で発揮された創造性に対する図案画の影響度を証明する方法をとった。

その結果、劉生の本画(油彩画)と図案画は、海外の作品受容や、創作における試行錯誤の過程で相互に影響を与えながら、造形的にはもちろん、創作態度や技術転用などで相関的に発展してきたことが明らかになった。また、劉生の本画作品にも見られるサインを含めた装飾文字とイメージの融合に関して、従来研究では日本美術の伝統に内在していたものをアルブレヒト・デューラー(1471-1528)の複製画から無意識的に読み取ったものとされてきたが、むしろ造形的にはウィリアム・ブレイク(1757-1827)の図案画の影響が顕著であることが分析から明らかになった。さらに図案画の創作活動は、その技術的な制約が劉生の創造性を促進させたこともわかってきた。素描と同様に形の根本である線のみで美を深めるしかない図案画や挿絵の色彩の不自由さが、かえって造形で装飾美や精神性を追求するのによってつけだっただけなのである。